

THE NEW
ザ・ニュー・ゲート
GATE

Kazamari Shirogi
風波しのぎ

18.聖地攻略戦

Illustration: 晩杯あきら

「THE NEW GATE」世界の用語について

●ステータス

LV:	レベル
HP:	ヒットポイント
MP:	マジックポイント
STR:	力
VIT:	体力
DEX:	器用さ
AGI:	敏捷性
INT:	知力
LUC:	運

●距離・重さ

1セメル=1cm
1メル=1m
1ケメル=1km
1グム=1g
1ケグム=1kg

●通貨

ジュール(J) : 500年後のゲーム世界で広く流通している通貨。
 ジュイル(G) : ゲーム時代の通貨。ジュールの10億倍以上の価値がある。

ジュール銅貨	=	100J
ジュール銀貨	=	ジュール銅貨100枚 = 10,000J
ジュール金貨	=	ジュール銀貨100枚 = 1,000,000J
ジュール白金貨	=	ジュール金貨100枚 = 100,000,000J

●六天のギルドハウス

一式怪工房デミエデン(通称:スタジオ)	—————	『黒の鍛冶師』シン担当
二式強襲艦セルシュトース(通称:シップ)	—————	『白の料理人』クック担当
三式駆動基地ミラルトレア(通称:ベース)	—————	『金の商人』リード担当
四式樹林殿パルミラック(通称:シュライ)	—————	『青の奇術士』カイン担当
五式惑乱園ローメスン(通称:ガーデン)	—————	『赤の錬金術師』ヘカテー担当
六式天空城ラシュガム(通称:キャッスル)	—————	『銀の召喚士』カシミア担当

目次 Contents

用語解説	—————	003
登場人物紹介	—————	004
ワールドマップ	—————	006
Chapter1 守護者	—————	007
Chapter2 砂海を越えて	—————	095
Chapter3 真の敵	—————	163
Chapter4 灼熱の戦場	—————	229
ステータス紹介	—————	285

フィルマ・トルメイア

521歳。ハイロード。
ゲーム時代のシンのサポートキャラ。
姉御肌でパーティのムードメーカー。

セティ・ルミエール

515歳。ハイピクシー。
ゲーム時代のシンのサポートキャラ。
妖精郷で精霊と暮らしていた。

ミルト

89歳。ハイピクシー。
ロリ巨乳が特徴の元プレイヤー。
戦闘狂として有名だった。

シュバイド・エトラック

521歳。ハイドラグニル。
ゲーム時代のシンのサポートキャラ。
竜皇国キルモントの初代国王。

ティエラ・ルーセント

157歳。エルフ。
強力な呪いの名残で髪の大部分が黒い。
故郷を追放され、シュニーに保護された。

シュニー・ライザー

521歳。ハイエルフ。
ゲーム時代のシンのサポート
キャラ。
500年間シンを待ち続けた。

シン

本編の主人公。
21歳。ハイヒューマン。
オンラインゲームで
名を馳せた最強プレイヤー。
デスゲームクリア後、500年
後のゲーム世界に飛ばされる。

ユズハ

エレメントテイル。
シンに助けられたモンスター。
基本は子狐の姿だが、
人型にも変身可能。

Chapter 1 守護者

THE NEW GATE

エルトニア大陸

THE NEW GATE

海

クウエイン海域

パツナー

ジグルス

No.43の聖地

エルクント

ローメヌ

アルガラツ

竜皇国
キルモント

バルバトス

ファルニッド
獣連合

ラナバシア

聖地カルキア

レンツ

ラルア大森林

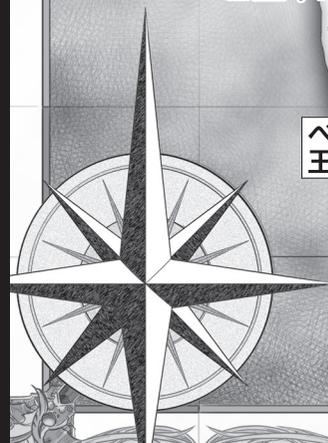
ベイルーン

ヒノモト

バルメル

亡霊平原

ベイルリヒト
王国



竜皇国キルモントに押し寄せる、かつてない規模のモンスターの大量発生に対し、巨大な防壁を建設しつつ迎撃する作戦に挑んだシン一行。

シンと仲間たちの活躍により戦闘の終わりが見えたころ、中立的な動きをしていた不定形モンスターの集団が、他のモンスターを排除しながらシンの前にやって来る。

そして、群れを率いる巨大なスライム状のモンスター・ゲルゲンガーは、オールバックの白髪のおお老紳士へと姿を変えた――。

「お初にお目にかかります。主の命を受け、シン様をお迎えに上がりました」

「俺を迎えに来ただと？」

頭を下げる老紳士、ゲルゲンガーを油断なく視界に収めながら、シンは問う。

いくら不定形とはいえ、元の大きさと違いすぎる。

言葉話すのはできたとしても、見た目が完全に人にしか見えない今のゲルゲンガーはシンの知識にはないものだ。警戒しないほうがいい。

「我が主が、シン様とぜひ話をしたいと仰せです。しかし、我が主は定められた場所より動くことのできない身。大変恐縮ではございますが、シン様にご足労願えないかと、こうして参上したしだ

いです」

「お前たちは、聖地から溢れる魔力で生まれたと聞いてる。とくに今回は、大量発生したモンスター同士で殺し合いをしてたって話だが？」

ゲルゲンガーの言う主とやらが迎えを寄越した。そう解釈するには、今回のモンスター大量発生は物騒すぎる。

「つきましては、まずどのような経緯で我が主が生み出されたのかを、ご説明する必要があります。少々長くなりますので、お時間をいただくことになりましたがよろしいでしょうか？」

「かまわない。話してくれ」

シユバイドとセティはまだ戦闘中だが、不定形モンスターたちの援護もあって、もう危険はない。今までの動きから、何か仕掛けてくるにしても狙われるのは自分だろうと考え、シンは近くまで来ていたシユニーに姿を消した状態で待機するように指示を出した。

「まず、皆様が戦ったモンスターの系統が3種類に分かれていたのは、すでにご存知かと思えます。その理由ですが、皆様が魔力の発生源としているあちらの孤島の中には、さらに3つの都市、皆様の言う聖地が存在しております。今回発生したモンスター群は、それぞれの聖地の勢力に分かれていたというわけです。私の主は、3つの聖地の内、ひとつを統括している方なのです」

「聖地が3つか」

そんな話は聞いてないぞと、シンは内心困惑していた。

シュニーやシユバイドに心話で確認するが、調査時はひとつしか確認できなかったという。ただ、調査は大陸から近い場所を基点に行われていたので、孤島の半分も調査できていない。残りふたつが見つかっていなくても、おかしくはないと返事があった。

「主についてですが、シンさまには『境界の守護者』といえ、おわかりいただけるかと思えます」

「あれか。でも、今まであったやつらは、ほとんど問答無用でこつちを殺そうとしてきたぞ？」
とくにイシユカー、正確にはイシユカーを操っていた守護者はシュニーたちを戦場に入れないように隔離してまでシンを狙っていた。

ゲルゲンガーの言うように、話をするなどという和やかな雰囲気など一欠片かけもなかったのだ。ゲルゲンガーの主が同じ『境界の守護者』なのだすると、やり口に違和感がありすぎる。

実際に行ってみたら実は畏で即戦闘なんてことになっても、むしろ納得してしまう確信がシンにはある。

「我が主は守護者の中では異端なのです。隣り合っているふたつの聖地から、攻撃を受けることも珍しくありません」

「どういふことだよ」

てっきり『境界の守護者』は共通して、自分を敵視しているものとシンは思っていた。

出会ったが最後、全力で殺しにくるので会話どころではないし、情報もほとんどない。もし、何

か情報が得られるならば、話を聞くのもやぶさかではないとシンは思う。

「『境界の守護者』とは、この世界そのものを守る存在。プレイヤーと呼ばれる者たちの流入もよくは思っていなかったようですが、まだ許容できるだけの要因がありました。しかし、シン様だけは別なのです。他のプレイヤーの方々と何が違うかは、すでに認識しておられるはず。異物と認識されるのは不本意でありましようが、これはある種の本能のようなものです。とはいえ、行動範囲が限られるため、直接襲うことはまず不可能。本人たちからすれば、菌がゆいことでしょう。問答無用で襲ってくるのは、そのせいもあるかと思えます」

ゲルゲンガーはすいぶんじょうせつと饒舌じょうせつだった。変身するところを見ていなければ、人と見分けがつかない。

「今の話からすると、『守護者』は全員、行動範囲が決まっているのか？」

「私がかぎりでは、間違いなく。聖地にいるものは、大抵聖地から離れません。最初に申しましたとおり、我が主がシン様の前に直接姿を見せられないのも、それが一番の理由でございます」

話に矛盾はない、ようにシンには思えた。実際に体験したことと一致する部分も多い。

ゲルゲンガーの話信用するかどうかは一旦保留だ。

「なら『氾濫』……そつちでいうところの、モンスターの大量発生。あれはどうなんだ？ あれのせいでこつちはすいぶん被害が出ている。まさか、俺を探すためのもの、なんて言わないよな？」

同士討ちしているのは確認済み。

そうでなくても、大量に放って見つけようとしたなどという言い訳を聞く気はなかった。

「誤解されないよう先に申し上げておきますと、聖地からまれる魔力によって起こるモンスターの大量発生、こちらでは『氾濫』と呼ばれているそれは、すべてを各聖地の主が意図的に起こしているわけではないということを、ご理解いただきたいのです」

「どういうことだ？」

『意図的に起こされる氾濫』と『偶発的に起こる氾濫』があるということだろうか、シンは眉根を寄せながら先を促した。

「聖地からまれる魔力は、皆様が生きている間に、無意識のうちに周囲に放出している魔力と同じなのです。もちろん、ある程度は抑えることも可能ですが、そうすると聖地の守護に当たっているモンスターの数も減ってしまうため、攻め込まれる恐れがあります。そのため、ある程度は魔力を放出していなければなりません。普段、皆様が対処なさっているのは、その魔力の一部が変化したものでありましょう」

「こちらを攻撃する意図はないとでも？」

どんな理由があるにせよ、モンスターに攻撃される側はたまったものではない。そんな意思を込めてシンがゲルゲンガーを睨むと、老紳士の姿が一瞬ぶるりと震えた。

その様は、まるで水に映った姿が波紋で揺らいでいるようだ。

「指示はしておりません。ですがどのような理由にせよ、生まれたモンスターが人や他のモンスターを襲うのは事実。ご納得いただけるものではないでしょう。だからこそ、我が主と話をしたい。これは私の推測ですが、我が主の意向しだいで、防衛に当たっている方々の労力やそれに伴う費用をなくすことも不可能ではないと考えております」

「伝言役なんだから。お前経由で話し合うってのはダメなのか？」

できるならさっさとしてもらいたい。それがシンの本音だった。

「私が話せることには制限がありますし、与えられた知識も限りがあります。皆様のように離れた相手と即座に連絡を取り合う手段もございません。大変恐縮ではありますが、残りは直接主にお尋ねください」

いろいろと話をしたが、それでもゲルゲンガーはメッセンジャーでしかないということなのだろう。

「仕方ないか。で、最初に言ってた生み出された経緯っていうのは？」

「はい。我々が出現当初周囲のモンスター同士で戦っていたのはご存知かと思えます」

「ああ、だからこうして壁を作ったり罫を仕掛けてたりしたわけだしな」

シンは視線を横にずらす。

まさに死屍累々^{ししかる}といった光景だったものも、不定形モンスターたちが自身の内部に取り込んで消化していくことで多少は綺麗になりつつある。

数体ならともかく、異常な数のモンスターの死骸を放置するわけにもいかない。

ゲルゲンガーたちが来なければ、シンたちがアイテムボックスを駆使して回収することになっていただろう。

「あれは特別なモンスター……私のような個体ですな、それを強くするためのものです。主の直接生み出した特別な個体の周りに、ある程度魔力をまとめて適当なモンスターの集団を発生させ、効率よくレベルを上げる。それがあの大量発生したモンスターの正体です。今回の場合、私と他の特別な個体では、生まれた目的は違いますが」

パワーレベリングのようなものだろうか？とシンは思う。

意図的にモンスターを発生させられるのならば、そういうことも可能だろう。プレイヤーでも似たようなことはしていた。知性を持つモンスターが同じことをしないとはいえない。

「我が主は少々事情があり、こちらの大陸に住む方々の調査を行っておりました。そして、私たちのような個体を生み出す必要のある情報を得ました」

「情報の内容を聞いても？」

「問題ありません。シン様方にも関わりの深いことですので」

関わりの深いことと言われて、シンは何があるだろうかと思案する。

ぱっと思いつくのは瘴魔か悪魔関連。いろいろと関わっているといえる。

それ以外となると、『境界の守護者』と呼ばれるものが動かなければならなくなるほどのこ

とは思いつかなかった。

「特殊な情報というのは、世界樹のことなのです。世界樹を失ったことによる世界の自浄作用、リフォルジラの出現が感知されました。あれはこの世界のシステムに由来するものですが、一歩間違えばこの世界を破滅させるものでもあります。それゆえ、何が起きているのか調査することを我が主は決めました」

「え……」

予想外の内容に、シンはつい声を漏らしてしまう。

思いつきに関わっていた事柄だったことも驚きだったが、それ以上に驚いたのはその対応の遅さ。ラナパシアの園での出来事は、数日前どころの話ではない。

同じようなことを考えたのだろう。フィルマとユズハがちらりとシンを見た。とりあえず続きを聞くとうと、心話で伝える。

「他の聖地の主も立場は違えど同じ考えに至り、調査することになったのですが、大々的な調査をする方法は眷族を放つ以外になく、それが今回の騒動へと繋がったのです。聖地からもれる魔力によって発生したモンスターに対処している皇国と話を付けられればよかったです。我が主以外には人そのものにあまり関心がないのでいかんともしがたく。モンスターを放つ時期を合わせることでできただけでも、僥倖という状態なのです」

シンが声を漏らしたのが、リフォルジラ出現の情報を聞いたからと判断したのか、ゲルゲン

ガーはそのまま話を続けた。

シンたちとしては、もう少しやり方があったのではと思ってしまうところだ。

「得た情報は共有するという約定のもと、私を含めたモンスターは放たれました。しかし、向かった先にシン様がいいたため、調査から攻撃へと命令が切り替わってしまったのです」

「世界を破滅させるリフォルジラの調査より、俺を倒すことのほうが重要だったのか？」
もともとシンを見つけたら攻撃するようになっていたとゲルゲンガーは言うが、いくらなんでも優先順位が間違っているだろうといわざるを得ない。

「世界が減ぶと申ししても、それはすべての生き物が死滅するということはありません。穢れを使い果たしたリフォルジラは新たな命の苗床となり、新しい世界が形作られていきます。調査を決めたといいましたが、それはリフォルジラを倒す、もしくは行動を停止させるといった行為のためではないのです。どこに出現して何をしているのか、それを知るためのものでした」

リフォルジラの出現は、世界の自浄作用。

それが起こるほどに穢れた世界ならば、減んでもかまわないと守護者は考えているようだ。

いわば世界のリセット。

リフォルジラによって今の世界が減んでも、また新しい生命が生まれ、次の世界を形作っていく。それを守護者たちは容認しているらしい。

「だからこんなのにびりしてたのか」

「はい。守護者は人の味方ではありません」

世界を守るが、その世界で生きるものには手は差し伸べないというスタンスのようだ。

「なのに、お前の主は俺を呼んでいると」

「はい。最初に申しましたとおり、我が主は他の守護者とは少々異なる考えを持っておりまして。

シン様の存在も否定しておりません」

守護者にとって不倶戴天の敵のような認識をされているシンを否定しない。確かにそれは、他の守護者から攻撃される理由になるだろうとシンは思った。

「否定しない理由を聞いても？」

「申し訳ありませんが、それについては知らされておりません」

「なら、この防衛にかかる手間を省けるかもしれないというのは？」

「それは簡単です。我が主が他の守護者の聖地を支配下におけば、防衛のためのモンスターを発生させる魔力を放出する必要がなくなります。そうなれば当然、こちらの大陸に流れてくる魔力もなくなりません。聖地からの魔力がないのならば、モンスターが大量発生することもないということ
です」

ゲルゲンガーの主は皇国とも交渉する気らしい。

皇国としても、防衛にかかる費用をなくすことができれば、国庫金の負担が大きく減る。それだけ周囲の開発や民衆への政策に使える費用も増える。

モンスターの影響で開発できそうな土地が使えなかったが、それにも手を付けられるだろう。皇
国側に利益がありすぎるのではないかと懸念すら出そうだ。

『もし可能ならば、皇国にとってはいよいことだとは思わが』

心話でゲルゲンガーからの情報を共有しているシユバイドが、考え込むように言葉を切った。

『気になることもあるのか？』

『モンスターが発生しなくなるのならば、様々な意味で喜ばしいことではある。しかし、仮にも世
界を守るといふ存在を倒すのは本当によいことなのか？』

シンを狙うのは許容できないし、襲ってくるなら倒すのもやむなし。しかし、守護者というから
には何かからこの世界を守っている。

そんな疑問をシユバイドはシンたちに投げかけた。一定範囲から出られないのならば、近づかな
ければいいだけでもある。

攻撃される側のシンは守護者を倒すことにそこまで消極的ではなかったが、シユバイドの指摘で
少し頭が冷える。

ゲルゲンガーはプレイヤーの流入なんてことも言っていた。

その言葉は、この世界がゲームとよく似た世界、もしくはゲームが現実になった世界と認識して
いたシンに、改めてこの世界は何なのか、という疑問を抱かせる。

「この世界についても、お前の主は知っているのか？」

「主が何を知り、何を知らぬのか。それは創造されたわが身にはわかりかねます。しかし、この世
界に生きる『人』よりも多くのことを知っているのは間違いないでしょう」

そう言ってゲルゲンガーは小さくうなずく。

本当は知っているのではないかとシンは思ったが、表情がまったく変化しないのでそこから嘘を
付いていないか探ることはできなかった。

なにせ今の顔は作り物である。感情が顔に出る、なんてこともないのだろう。

この世界のことについて、人よりもモンスターのほうがよく知っているといるという点については、シ
ンも実体験から理解している。

エルフヤピクシーのような長命種ですら、『栄華の落日』^{えいが}前から生きている者は多くない。伝承
という形で残っていても、正確に伝わっていないことも多かった。

かつて実際に起こっていたことも、今では不確かな伝説になってしまっていることもある。

ヒノモトのフジにいたカグツチャ、シンたちのホームのひとつラシユガムに棲み着いたツアオバ
トなど、記憶と知識を持つモンスターのほうが世界の、いわば真理に近い存在だ。

(長く生きてるって意味じゃ、ユズハもそうなんだけどな)

そう思いながら、シンはちらりとユズハに視線を送る。

深い叡智^{えいち}を有するモンスターとしても、エレメントテイルは有名だ。子狐モードの様子からは想
像するのは難しいが、本来のユズハならば大抵のことは知っていそうなものである。

「……わかった。話を聞かせてもらおう。ただ、他の守護者をどうするかは話を聞いてからだ」
「ありがとうございます」

他の聖地の守護者を倒すことは、話し合いをする条件というわけではない。

シンは話を聞いて、その上で倒す必要があるというならば倒すし、必要なしと判断すれば倒さず帰るつもりだ。素直に帰らせてくれればだが。

『本当に行くのですか？ 聖地は守護者の本拠地のようなものでしょうし、何か罠を仕掛けている可能性もあります』

行くと言ったシンに、即座にシュニーから心話が入った。

今までは偶然による遭遇戦のようなものだったが、今回はそうではない。交渉などという手段を使ってくる時点で、今までの守護者と違うのは明白だ。

シンたちには本当に守護者同士で敵対しているのかもわからない。

シュニーの懸念けんねんももつともで、もしかすると向かった先で、3体かそれ以上の守護者に襲われる可能性だってある。

『わかってる。それでも、この世界について無知でいるのはよくないと思うんだ』

そもそも、シンは理由もわからずこの世界にやってきた。

いったい何がどうなっているのか。来た当初こそ気になっていたものの、今ではそれを考えることはほとんどない。

この世界でどう過ごしていくか、目の前の問題をどう片付けるか。そういったもののほうが圧倒的に多い。

ゲルゲンガーは、シンは他のプレイヤーと違い異物と判断されていると言った。

シンが思い当たるのはゲームで死ぬことなくこちらに来たこと。もしくは最終ボス扱いだったオリジンを倒したことのどちらか。

しかし、本当にどちらかなのか、そうだとすればなぜそれが異物扱いされる要因なのかなど、わからないことばかり。

『いや、少し違うか』

もつともらしい理由を考え口にしたが、真面目に考えてふと思う。

モンスターの大量を遮る壁かべもでき、残りを作り終えればゲルゲンガーの主が他の守護者と争ってまたモンスターがあふれようと気にする必要はなくなる。

土地はもつたないが、モンスター相手に交渉するのは本当に可能かもわからないし、交渉が必ずうまくいく保証もない。向こうが出てこれないならほうっておけばいい。

それが一番楽で、面倒のない解決法だ。守護者がなんと言おうとシンはこの世界で生きていく。特別どこかを支配しようだとか、力を使ってわがままに生きようだとか思っているわけでもない。

普通に暮らせるのが一番なのだ。今ならば、どこかに腰を落ち着けて実力のある冒険者として生活するのも可能だ。スキルを使えば、正体を隠すことなどたやすい。

ならなぜそれをしないのか。わざわざ守護者に会いに行こうなんて思うのか。理由は多々あれども、つまりは認めて欲しいのだとシンは思う。

この世界に対して、自分は悪意など持っていない。この世界で生きて行きたい。それを伝え、この世界で生きていいと認めてもらいたいのだ。

「主に先触れを出します。すぐに出発なさいますか？」

「話を通しておかないといけない連中がいるが、待たせて大丈夫なのか？」

向こうが来られない以上シンたちの都合に合わせるほかないのだが、あまり時間をかけて第2のヘルトロスやセルキユスのようなモンスターが出てきても困る。

「今回のような大量のモンスターを発生させるのは守護者といえども簡単なことではありません。人の暦ならば、1月は余裕があります」

人の使う時間の概念もあるようだ。太陽の昇った回数や傾きなどで表されるかと思っただがそうでもないらしい。

「わかった。なら2日後の今くらいの時間に……いや待った。お前たちって時間は計れるのか？」

「日数はわかりますが、細かい時間は指定いただいても対応できるかと言われますと難しいとしか言えません。我々には皆様と同じ時間を正確に計測する能力がありませんので」

シンや元プレイヤー、サポーターキャラクターならばメニュー表示の隅に時刻表示がある。

そうでなくとも、ある程度身分の高い人や裕福な人ならば時計を持っていることも珍しくない。

しかし、モンスターの身ではさすがに難しいようだ。

「なら、これを渡しておく。見方は知ってるか？」

「初めて目にします。詳しい使い方について、ご教授していただいてもよろしいでしょうか」

シンがゲルゲンガーに渡したのは、アイテムボックスの中に入っていた懐中時計だ。

ゲーム時代に作製したもので特別な能力はほとんどついていない。使い方を教えて現時刻と同じくらいに戻ってくると告げる。

「さて、まずはモンスターがどうなったかと、ゲルゲンガーの言っていた内容について軍の責任者に報告だな」

ゲルゲンガーは部下を先触れに出し、自分はその場で待機しているらしい。

シンたちはシユバイド、セティと合流後、転移で壁の近くまで移動していた。ゲルゲンガーはシンたちが転移を使えることはすでに知っていたので、隠さずに使っている。

「あの話、本当なのかな？」

「そうねえ。ちよつと急展開すぎる気もするわね」

ゲルゲンガーとの会話中は静かだったセティとフィルマ。合流してからはシユバイドも含めて積極的に意見を交換している。

「本当に行くの？ イシユカーのときみたいに、隔離されたら実は敵だったって場合にあたしたちじゃ手が出せないわよ？」

グリフォンは使ってこなかったが、イシユカーはシュニーをはじめとしたサポートキャラクターの移動を制限する、特殊な結界のようなものを展開していた。

それを知るセティは、毘だつた場合のことを考えて話をしている。

「あれは完全に俺たちの知らない技術、というか力だ。ぶっちゃけ知ってたからって戦いになったらどうにもならない。それに、守護者が聖地から動けないって話も嘘じゃないとしても全員がそうってわけでもないだろうな。ゲルゲンガーは自分の知るかぎりとしか言っただけ。例の結果というか、壁というか、とにかくあのよくわからんやつを使ってきたイシユカーなんて、出てきたのは特殊な状況だったとはいえダンジョンだ。少なくとも、守護者が聖地の外で力を行使できるのは間違いない」

イシユカーがいたのは、深海古城と海底神殿のふたつのダンジョンが重なっていた場所の奥地。

イシユカー自体は守護者にとつとられていたような状態だったとはいえ、その力は間違いなく本物。ゲルゲンガーの話をすべて鵜呑みにはできない。

ただ、ゲルゲンガーは自身と与えられている情報には制限があるとはっきり口にしてた。

ゲルゲンガーの意思で言ったのか、それも伝えるように言われていたのかはわからないが、あの場で与えられた情報には穴があると気づけるようヒントをくれたようにも思える。

「向こうはこっちを敵だと思ってる。こっちが避けていても、いつか襲ってくる可能性はぬぐえない。まだ味方とは言えないけど、立ち位置の違つと話をするのは悪いことじゃないと思う。あ

とはそうだな。敵の本拠地なら、いくら本気で暴れても気にしなくていいっていうのもあるか」

初めて戦った守護者のグリフォン、海底で戦ったイシユカー。そのどちらも、方向性は違つが強かったことは間違いない。

グリフォンの異様な再生能力は、よくわからない力が働かなければいつまで倒し続けられればいいかわからなかったし、イシユカーは戦闘力そのものが、グリフォンとは比べ物にならないくらい高かった。

そんな相手と戦うとなれば、周囲のことを気にする余裕はあまりないだろう。

グリフォンのときは一緒にいたのが選定者のリオンだったからこそ、ある程度戦闘に集中できたのだ。ただの一般人だったなら、行動に大きな支障が出ていた。

「もしあの壁をつかってきたら、我が助けに行こう」

4メルほどの体躯たくでシンの隣を歩いていたユズハが、おもむろに言った。

真面目な話の最中なので、ユズハも本来のしゃべり方になっている。子狐モードの子供っぽさは演技かと思つたシンだが、あの状態ではあえて知能を下げていっているらしい。

「あの時と同じなら、私も力になれるかな？」

「何か条件があるっばいんだよな。ユズハとティエラに共通する何かか」

それらしいものならば挙げられるが、サンブルが少なすぎて検証のしようもない。シュニーたちが壁を抜けられなかったことも、サポートキャラクターだからと安易に考えていいのかもわからない

いのだ。

「わからないことだらけね」

「だが、本来はそういうものだろう」

辟易へきえきした様子のセティに、シュバイドは落ち着いた口調で言う。

「我らはまだ世界のことを知っているほうだが、それでも知識としてはほんの一部。ましてや今まで存在も知らなかった相手のことなど、わからないのは当たり前だ。我らの知り得た情報も、元を辿れば誰かが危険を冒おかして得たものは多い。結局のところ、本当に得たいものを得るには危険に身をさらさぬわけにはいかんのだろうよ」

「んー、でも前みたいなのはできないんだし、もうちょっと楽でもよくない？」

「お主……」

ぶーぶーと文句を言うセティに、シュバイドは呆れ顔だ。

武人氣質であり、シンがいなくなったあとと様々なものと戦ってきたシュバイドである。欲しいものは戦って勝ち取る。時には危険に飛び込むことも必要とといった考えはそこまで違和感のあるものではないのだろう。

そんなシュバイドに対して、セティはそこまで戦いに積極的ではない。

戦いを回避きひするような性格ではないし、相手が明確な敵、瘴魔デーモンや悪魔などなら容赦なく殲滅せんめつする。ただ、自ら危険に飛び込んでいくような性格でもない。

加えて、ゲームだったころのように、死に戻りを前提とした検証はできないことを暗に言っている。

シュバイドの意見とセティの意見。方向性は違えども、どちらも正しい。

「大人しくすれば見逃してくれるって言うなら、それでもいいっちゃいんだけどな」

認めては欲しいが、関与しないでいてくれるなら無理に守護者同士の争いに首を突っ込もうとも思わない。しかし、そう簡単な話ではないだろうとシンは思う。

戦っていないはずのゲルゲンガーの主が自分を知っていた。守護者間で情報共有がされている可能性は高い。襲われたからという理由があれども、すでに2体の守護者を倒してしまってもいる。静かに暮らしていれば大丈夫という保証はどこにもない。

「シンがいくと決めたなら、私もついていくだけです。次は、突破してみせます」

壁の話が出たからか、シュニーが静かに燃えていた。絶対に突破してやるという決意と気迫が、隣を歩いているシンにはビシバシ伝わってくる。

「そこについては、あたしもシュニーと同意見ね」

「うむ、何度も同じ手で対処できるなどと思わせてはおけん」

壁に手も足もでなかったのを悔しく思っていたのはフィルマやシュバイドも同じようで、シュニーに勝るとも劣らない気迫が放たれていた。

サポートキャラの面々は、ティエラも含めて空いた時間で手合わせをしているので、もしかする

と自分も知らない技でも編み出しているんじゃないかと思うシンである。

「3人とも少し落ちて着こう。ほら、セティは落ち着いて……ないな」

セティはとくに気迫や闘志のようなものを発してはいなかったので冷静なのかと思いきや、代わりに魔力がだだ漏れだった。

シュニーたちと種類は違うが、殺る気に満ちているのは間違いない。妙に透明感のある微笑を浮かべながらも、目だけは『絶対ぶち抜く』と雄弁に語っている。

「とりあえず、皇国軍と合流するまでには抑えてくれよ？ 絶対びびるぞ」

すでにティエラが額から汗を流しながら、少し涙目でもシンに助けを求めている。

シュニーたち4人が出す闘志や魔力が合わさって、常人なら近づいただけで気絶するほどの威圧感が生じていた。

十

「モンスター側から接触があった、か。にわかには信じがたい。しかし、シン殿たちが嘘を言う理由もないか」

軍と合流したシンたちは、早速総指揮官であるレイグに報告があると告げ、ゲルゲンガーからもたらされた情報を開示した。レイグもさすがに驚いたようで、次の行動を決めかねている。

「聖地のモンスターかあ。調査隊に参加したことがあるけど、そんなモンスターは見た覚えがないなあ」

シンが武器を強化したことでより立ち位置が上がったらしいミルトが、首をひねりながら言う。腕を組んでいるので、非常に大きなものが持ち上げられ存在感が増していた。

ミルトが調査で遭遇したモンスターは、小型もしくは中型がほとんどで、どれも既知きちのモンスターだったという。

「ミルトなら気づいたことがあるかと思っただけど、そう簡単な話でもないのか」

シンはグリフォンが出た聖地で起こった、引つ張られるような感覚がなかったかと心話で確認したが、それもなかったと返答が来る。

「聖地に行くんだよね？ だったら、僕も一緒に行っちゃだめかな？」

「少し確認したいこともあったから、むしろこっちから頼むつもりだった。けど、戦団のほうはいいか？」

ミルトは元ブレイヤー。もともとこの世界にいた住民とは違う。

加えて、この世界に来た経緯がシンと異なるので、可能なら、守護者がミルトにどう反応するか見たかった。

しかし危険も伴うので、あまりにもあっさり承諾されると少し拍子抜けしてしまふ。

「今回の騒動の原因に関わることだからね。大丈夫大丈夫」

立ち読みサンプル
はここまで

教会戦団が派遣された目的は、聖地からもれる魔力によって生じたモンスターからの被害を食い止めること。ゲルゲンガーの話が本当なら、皇国だけでなく援軍を出す教会や他国にとってもメリットがある。

装備とステータスの上昇でゲーム時代よりも強くなった今のミルトならば、戦力面で見ても足手まといにはならない。

「こちらからも人員を派遣したいところだが、シン殿たちについていけるほどの強さを持つ者はこの場にはおらんからな」

ゲルゲンガーの主はもしシンが協力し、他の聖地を制圧できれば皇国との交渉も可能だろうと言っているらしいので、皇国からも同行者を出したいようだ。

「状況しだいではありますが、場合によっては先ほどの『氾濫』以上の場所に突っ込むことになるので、選定者でも厳しいところですね」

向かう場所はシンにとっても未知の場所。軽々しく守ってやるとは言えない。壁を発生させるアイテムの護衛部隊やもともと前線にいた部隊の選定者などが候補に上がったが、戦闘力を聞いてその結論を出した。

シンたちのパーティではミルトとティエラが戦闘力の面で一段落ちるが、それでも装備込みならば神獣とも戦える。

装備ならシンが提供するという手もなくはないのだが、身の丈たけにあわないう装備は装備者の判断を

狂わせることもあるので進言はしなかった。

「すぐに交渉が可能というわけでもありませんし、まずはこちらで様子を見てきます。向こうの要求を呑むかについても、話してみないことには判断が付きませんから」

「そうだな。向こうには向こうの思惑があるだろう。我らが割って入れる話でもなし。どうするかはシン殿らの判断に任せよう」

指名されたのはシンだ。自分たちは口を出せる立場ではないとレイグは締めくくった。ただ、「大地を壁で遮るのではなく活用できれば、それに越したことはないのだがなあ」と独り言のようにつぶやいたあたり、期待はしているようだ。

「それで、すぐ行くの？」

「一応2日後って言うてあるから、まだ時間はあるぞ。さすがに報告だけしてじゃあいつてきますってわけにはいかないだろうと思っただから」

「でも思っていた以上にさらっと任されてしまったと」

「そうなんだよ。もつとこう、誰々を同行させて欲しいとか、モンスターを信用できるのかとか、意見が出てくるもんだと思っただよ」

ほとんどお任せ状態なので、これはこれでどうなんだろうと思わなくもないシンである。

「シユバイドさんは元竜王だから、皇国に不利益になるようなことをするとは思ってないんじゃない？ シユニーさんも国際的な信用を得てる人だし、なんていうか大使扱いでもおかしくない、み